

平成 28 年 3 月 2 日

博士論文審査報告書

デザイン研究科長 様

審査員主査

矢部 和夫



審査員副査

羽深 久夫



審査員副査

城間 祥之



審査員副査

中原 宏



学位申請者氏名	青塚 大輔	学籍番号	1265001
申請学位 (専攻分野)	博士 (デザイン学)	専門分野	<input checked="" type="checkbox"/> 人間空間デザイン分野 <input type="checkbox"/> 人間情報デザイン分野
タイトル (サブタイトル)	札幌市の地域力を形成する構成概念の解析と 地域コミュニティの活性化に関する研究		
審査日程	最終試験： 平成 28 年 2 月 5 日 公開発表会： 平成 28 年 2 月 16 日		
審査結果	<input checked="" type="checkbox"/> 合格 <input type="checkbox"/> 不合格		

※ 様式第 6 号「博士論文内容の要旨」を添付すること。

審査結果の要旨

本論文は札幌市の地域力を形成する構成概念をモデル化し、この構成概念をもとに地域コミュニティの活性化を図ることを目的としている。これまで、特定の集合体や組織での人間関係や意識構造により、地域コミュニティを論じる研究は多かったが、地域や住民の活力の視点から地域コミュニティの活性化を論じる研究は十分行われてはこなかった。

本論文は札幌市の社会指標、ヒアリング調査とアンケート調査データ等をもとに緻密な解析を行い、論をまとめた労作である。とくに、地域力をハード（物的指標）、ソフト（社会指標、意識調査データ）の両面から数理解析手法SEMを用いてモデルとして構造化した点は方法論として新規性に富んでいる。さらに、このモデルの適合性を検証するとともに、地域力を構成する各要素の寄与率の違いを評価することができたことは大変意義深い。

本論文の主な研究成果は以下の通りである。

- 1) 札幌市の行った町内会・自治会に関するアンケート調査の分析を行い、その結果、身近な地域交流やふれあいの場に対してニーズがあることなど、町内会・自治会の活動実態と課題を明らかにしている。また、札幌市南区の9箇所のまちづくりセンターへの自ら行ったヒアリング調査結果から、住民同士の交流実態を明らかにし、現状の地域の活動は高齢者が主体となっており、常態的に後継者が不足していることなどを示している。
- 2) 生活・居住環境に関するアンケート調査を行い、各連合町内会の現状と意向をまとめている。また、札幌市内のまちづくりセンター区域を人口構造区分に類型化し、生活・居住環境を把握する指標値から各類型の特徴を明らかにして、類型ごとに地域コミュニティの活性化に必要な要素を分析している。主な結果として、老年人口比や生活・居住環境の整備水準と住民の活動に関連性が見出されること、現在の整備状況と将来の住民のニーズに乖離が生じていること、および今後は多世代間交流に対する期待が大きいことなどを明らかにしている。また、買い物施設や駅を中心とし、500m勢圏の充足率の解析から、これらの充足率が低い地域は郊外地に分布し、戸建て住宅や持ち家世帯が多く、高齢化率が高いことを明らかにしている。
- 3) これらの解析と分析の結果および先行研究を踏まえて、地域力は愛着度（郷土愛）、ハード面（施設の満足度と施設への行きやすさという地域構造）とソフト面（付き合いの関心度、自治意欲と交流の満足度という地域コミュニティの実態）という3つの要素の影響を受けるという、先行研究に見られない新しい概念モデルを構築している。このモデルの妥当性と各要素の因果関係の強さを適切に検証するために、札幌市内の全区から均等に得られた合計およそ800人の大規模アンケート調査のデータを用い、構造方程式モデル(SEM)という複雑な統計解析を行っている。SEMによるモデルの適合性は極めて高く、このモデルの正当性は保証されている。解析結果

から、地域力はハード面よりソフト面の方が強く影響を受けており、中でも自治意欲の影響を特に強く受けていることや、地域への愛着度とハード面の施設の満足度からも大きく影響を受けていることを明確に見出している。

- 4) さらに、SEMの結果をもとに地域力の低下につながる項目を抽出し、低下項目を有する地域を検討している。主な成果として、影響力の大きいソフト面では都市機能が充実しており、社会移動の大きい都心部や、借家、集合住宅や単身者が多い環境で住民自治の弱さなどの脆弱性があげられている。さらに、今後地域コミュニティの維持と活性化のために地域マネジメントの仕組みを構築して、地域力向上のための取り組みを推進することの重要性を述べて結びとしている。

以上のように、本論文は、今後の札幌市の施策を計画する際に有効な新知見を提供するものである。また、本論文で展開した地域力の構成概念モデルと分析手法は、日本全国の各市町村の地域力の分析に適用することが可能であり、本研究の学術的意義は極めて深いと判断でき、よって博士論文（デザイン学）として十分価値あるものと認められる。

平成 28 年 2 月 5 日（水）、本学芸術の森キャンパス「大学院棟レクチャールーム」において審査員 4 名による「本審査会（最終試験）」を実施し、本審査会実施要領に基づき、本論文についての発表と口頭試問を行った。

多方面からの質問に的確に回答できたことに加え、論文も予備審査での指摘・修正事項を充分検討し、その修正結果を論文の新旧対照表としてわかりやすくまとめ提出している。この表も参考にしながら適正な修正が行われたことが確認できた。さらに、調査や解析の方法や結果等を「本編」とは別に「資料編」として提出し、本研究の詳細を後学のために残そうとしたことが評価できた。特に論文題目を修正したことにより、題目と研究目的・成果との整合性が高まり、全体が具体的で明確な内容となった。また、結論の内容が追加されたことにより、議論が一層深まった。加えて、本論文は、本学大学院デザイン研究科の博士論文審査基準である研究課題の意義と独創性、先行研究の調査、研究方法の適切さ、結果・考察の明確性と新規性について十分満たされていると判断した。これらのことから、最終試験は「合格」と判定した。なお、加筆修正に関する軽微な指摘事項が新たに挙げられた。

最終試験「合格」を受け、平成 28 年 2 月 16 日（火）、本学芸術の森キャンパス「階段教室」において「公開発表会」を行った。この際多くの質疑に対する的確に回答できたと判断する。

平成 28 年 2 月 26 日（金）に提出された最終論文は、公開発表会での質疑や助言を十分にふまえるとともに、最終試験後の指摘事項については、すべてにわたり適正な修正が行われていると判断する。

以上のことから、博士論文審査は「合格」と判定する。